
軌跡の果てに

てるタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
軌跡の果てに

【Nコード】
N7940E

【作者名】
てるタン

【あらすじ】
これは、新しく中学3年になった生徒たちが受験戦争という大きな壁の真っ只中、様々な困難な出来事に立ち向かう、青春ストーリーである。

最悪の始業式

第1編・最悪のクラス替え

「ジリジリジリ！」壁に不自然にかけてある時計が鳴った。僕は二度寝しないようにわざわざ目覚まし時計を高い位置に置いてあるのだ。未だ夢と現実がうやむやなまま、起き上がった。

今日は、井出中学校で3年目となる始業式。毎年この学校では、クラス替えがある。

「どんなクラスになるのかなあ？」と、不安と期待を胸に抱いたまま1階のリビングに降りてきた。

キッチンでは、お母さんが朝食の準備を忙しそうにしている。お父さんは、僕が起きる前の朝早くに仕事にいつてしまう。だから、僕は、いつも一人で朝食を食べなければならない。

「おはよう！」と、互いに挨拶をすると、僕は自分のイスに座り、朝刊の新聞を見た。今日のテレビ欄を見ながら、「今日は魔王がやるのかあー」などと心の中で呟いていると、「はい。朝ごはん。今日から中3になるんだからビシツとしなきゃね！」

お母さんの言うことは本当にうるさい。だけど、これにいつも助けられてきた。

たとえば、僕がお弁当を忘れかけた時に、お母さんが「お弁当もった？」と注意深く言ってくれたおかげで、弁当を忘れずに済んだ。他にも数え切れないほどあるが、ここでやめておこう・・・。

今日の朝食は、味噌汁と大好きな目玉焼き。よく、目玉焼きはソースか醤油のどっちかと言うけれど、僕はソースじゃないと食べられない。

そんなことを思っているうちに朝食を食べ終え、1ヶ月も着ていなかった制服を身にまとい終えると、「ピーンポーン」と、「チャイム」の音が聞こえた。

わっちだ。わっちは、小2からの親友で、いつもこうして僕の家まで迎えに来てくれる優しいヤツだ。

鞆を持って出ようとして、お弁当がないことに気づいた僕は、お母さんに「お弁当は？」と聞くと、「あれ？今日はお弁当ないんじゃないかったっけ？」と一言。ちよつとドジってしまった僕は、玄関を飛び出る。

そこには、不満げな顔でこちらを見るわっちがいた。

「ごめん！待った？」とお詫びを言って、いつもの道を2人で歩いて行く。通りの木々は、新しい季節を待っていたかのように桜が咲き誇っている。とても綺麗な光景に僕は、鞆から携帯を取り出し、近くの桜を1枚パシャリ！僕につられてわっちも、鞆から珍しい迷彩柄の携帯を出して、1枚パシャリ！

2人とも携帯をしまうと、いつもの道を再び歩き始めた。

通りのガソリンスタンドは、人気がなく、1&mp;#8467;180円もを超している。

そのガソリンスタンドを通り過ぎた直後、後ろから人の声がした。

「おーい！てる、わっちー！」

同級生の星だ。僕とわっちと星は小6に知り合い、現在まで交友関係を築いている。でも、よく星はわっちを馬鹿にする・・・。

「よおー猿！」

これは、星がよくわっちに言うことだ。わっちは相変わらず無視をして行く。

新しいクラスで3人とも一緒になるといいな、なんていう話をしながら井出中の正門の前まで来た。正門では、生徒会の人達が入学生のクラス表を配っている。

「そういえば・・・この頃はとても緊張したなー」

と、僕が言った。中学初めてのクラスというのは、とても緊張もの

だった。誰も友達がいない、ましてこの3人ともバラバラになってしまったからだ。

そんな過去を振り替えながら、昇降口に入る。一瞬どこの下駄箱か迷ってしまったが、すぐにわかった。

クラス替えは、2年の教室で発表するらしくまた去年の人たちと会うことになった。

みんな、髪型や制服が変形していて中には染めている人もいる。同級生におどおどしながら席に着くと、友達の小嶋ことコジが僕の肩を叩いて言った。

「久しぶり。同じクラスになるといいね！」

その言葉に一安心した。やっぱり変わらない人は変わらないんだなあと思った。

チャイムが鳴るのを待っていたかのように、先生がはいってきた。

元担任の川上だ。川上は、横浜国立大学卒のエリート先生だが、そうとは思えないほどユーモアがあって面白い先生だ。

「みんな席につけ。これから新しいクラスの紙を配る。」

この先生の一言で、みんなはとても騒がしくなった

僕のところに紙が回ってきた。最初は何が書いてあるのか全く分からなかった。気持ちを落ち着かせてもう一度見てみる。

「あった！」

思わずわけがわからなく叫んでしまった。僕のクラスは、「3年2組・18番」だった。なんと、わっちと星も同じクラスだった。これにはさすがにびっくりして、友情の縁というものを感じた。

クラス内では、まだ騒ぎがおさまっていない。

「よっしゃあー！」と大声で喜ぶ人もいれば、

「最悪ー！」と、不満げにいう人もいる。

僕は、どちらかといえばは不満側だ。正直に言うところ、不安なのかもしれない。だって、友達がわっちと星ぐらいしかいないのだから・・。

まだ、不安が抑えきれないまま先生が言った。

「それじゃ、今からそのクラスに行ってください！私は、もうこれであなたちとはお別れです……。さようなら。」

先生の言葉がやけに悲しそうだった。それは、のちの明日わかることだった。

先生の言葉で、ゾロゾロと教室を後にしていく。中には、もうあえないようなお別れの会話をしてる女子もいる。

僕たちも教室を後にした。わっちも一緒に付いてくる。僕たちの新しい教室は、3階なので2階から階段を使って歩く。しかし、それがやたらと長い。上るだけでしんどいこの階段を1段づつ踏みしめて上がっていく。もう少しでオレ達の教室だ。近づくたびに、鼓動が高鳴る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7940e/>

軌跡の果てに

2011年1月27日06時02分発行